

114
A 4154
4

浪華日記

壬申正月十日渡巴書状

伊澤道一

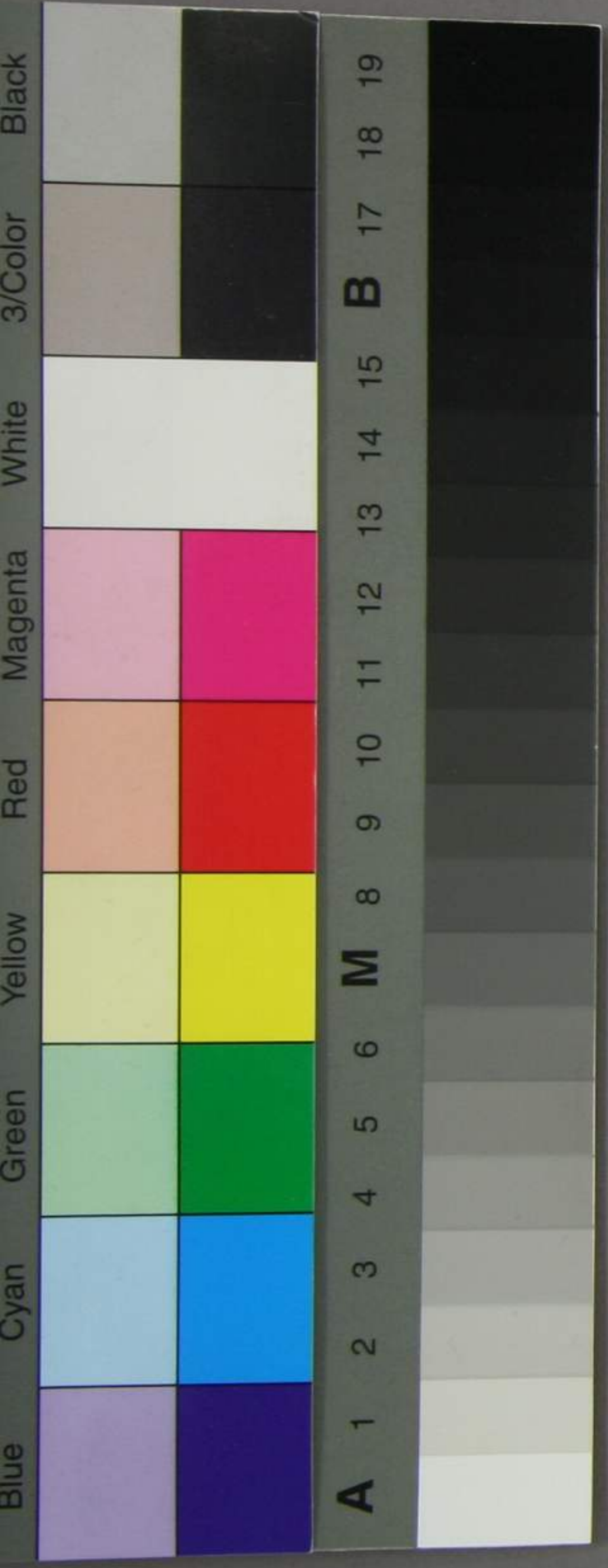
大正十一年四月
伊澤道一
贈

十月廿日洋服ヲ帶劍シタル人教師ヲ訪フ疑ラクハ学

校活ノ人ナルヘシ



教ヲ信スル者数人捕ヘラレリト私共ハ左様ノ事ハ
アルニモ軟谷松エノゴロ長寄テ教師ニモ逢ヒ新
聞ヲ書リ人ニモ逢ヒテリガ何モ聞セ又左スレハ
ヱリ咄ハ虚説ト思ニスヨシハ実ニモセヨ恐ルコトハナヒ
耶獲ハ神ノ道ヲ弘ナテ人ニ代リテ十字架ニカリ死ニ
ミシリ昔カラ此道ヲ弘ナテ死スル人ハ甚多ク道ノ
為ニ死ス人ガタケレハ道ガ早フ開ケニス私共エノ日本
ニ渡リテ居ニテハ本國ニ還テ死スルトハ思ヒセ又設



謹テ考ニ我國躰固ヨリ渠ト併立タス大道ノ仇敵人民ノ
楚毒断然掃ハサルヲ得サルモノ也然ニ我邦人未タ彼教
師ノゴトリノ其志ノ切ナルヲ見ス甚ニ至テハ渠カ邦教
害アルヲ不思者アリノ嗚呼悲哉春眠不觉曉ノ
間渠駭々トシテ日ニ進ニ數十万人ノ心髓ニ染著シ
竟ニ不可翻廻ニ至ラハ我邦ノ教官誰ニ對シテカ神州ノ
國躰ヲ宣説シ誰ヲシテ

天祖ノ息澤ヲ奉戴セシメシヤ嗚呼危哉タニク身ヲ虎
穴ニ投シ其體ヲ親ントスル者ハ我等黃吻兒如何
コテ彼船來教師ニ抗スルニトヲエシヤ清潔ナル
天祖ノ赤子竟ニ彼耶櫓ノ子弟トナリ每人十字架ノ印ヲ
佩ルニ至ラント仰天泣血スルノミ

此五日造幣局ノ外國人來ル樂ヲ奏シテ祈禱ス

此七日安息日也十字ヨリ説法ス樂ヲ奏シテ聖書ヲ誦ス屈

曲哀婉コノ日川崎ニ任スル人來ル教師ノ部屋ニテ人ヲ
飲食ス此横濱ノ人ニテ當時造幣局ニ居ル由姓名ハ分
明セヌヨホドコノ教ニ練習シタル人ト見ユ

○奥州二本松ノ人姓何名ハウリウトカ申ス當時大坂浩ノ
官負ナルヘシ久シク足痛ニテ日ニ駕籠車ニテ勸込ト
申スエトナリウリヤマス先年長崎ニテ懇見ノ由ニテ
コノ頃手紙ヲ遣ハシ其人ヨリ写真ヲ贈ラル由傳
告ノ物語ナリ大坂セシナニ節ニ居住ノ由ナリコノ教ノ
信否ハ未知

此八日ウリヤマス祈禱ノ文ヲ訳セヨト云余已ムコトヲエス其意ヲ
記ス

不能コトナキイト憐アル我父我等羊ノ迷ルカ如シテ父
ノ道ヲハナレ己カ情欲ニ従ヒ父ノ聖ナル徳ヲ犯セシ抑ヤスベキ
トナシ然レトモ父曾テ我等ガ心中聊ノ善ヤハコ
約ノゴトリ我等苦ナル罪人ヲアハレシ玉ハ己カ罪ヲ免
露スル人ヲ免シ玉ハ悔改スル人ヲ本ニ復シ玉ハイト
憐アル我父聖ナル名ノ栄ニヨリテ願ク我等神ヲ敬
ヒ義ヲ行ヒ身ヲ脩テ世ヲ過スコトヲ耶模ノ功シノ為
許シ玉ハ亞孟
此日合カヲ乞者來ル教師金ヲ与フ 此取乞食ニ團圍
及米金ヲ与ルコト西三回
廿九日造幣局ノ外國人參ノ詣ス

此日約書無故怒其兄弟者必于我審判ノ句ヲ講ス蓋
兄弟トハ宇内ノ人ヲ指ス余問故ト何モノゾ答義ニ背セ
問如何ナルヲ義ニ背リト云ゾ曰若人神ノ言ヲ用ヒス耶模
ヲ惡シ或ハ此教ニ敵スルヲ不義ト云コレ大父ニ敵スハ也
余曰現ニ日本ノ人
帝王ヲ初メテ教ヲ信セス國人ニテ教ヲ惡ム然ハ大父ノ罪
人也是等ノ人ヲ怒ルハ教ノ本旨ナリヤ教師歎曰可
憐日本ノ人魔鬼ノ教ヲ信シテ父ノ道ヲ不知ト云テ
止又余亦強テ伺ハス互ニ歎息シテ別ル
十二月朔外國人參詣不羨樂祈禱ス
二日約書我父在天者願右聖我兩國臨格ノ句ヲ講ス蓋
爾國トハ天國ニシテ耶模ノ國ナリ臨格ハ來ルナリ日本ハ

異宗ノ人スベテ神或ハ孔子佛
ヲサレテ魔鬼ト云或ハ天狗ト云

耶稷ヲ信セムハ耶稷ノ國ニラス是故ニ信徒懇願シテ魔鬼ヲ遣ヒ天國ヲ來サニエトヲ望ナリ_一コノ句亦國人注意スヘシ我

天祖ノ國ヲシテ彼耶稷ノ國ヲラレニシトヲ懇求ス豈可不惡乎

三日 約書母以聖物与犬毋爾玕珠投豕恐彼踐之足下且轉而噬爾ノ句ヲ講ス 蓋聖物玕珠ニシテ教也

豕犬ハ薄信者也教師言ヲ尽テ説リ余汗身セリ吾安息也説法祈禱ス川寄ニ住スハ横濱人亦來ル

六日 約書又有二門徒謂之曰主容我先往葬父耶稷謂之曰爾從我任夫死者葬其死者_一ノ句其道ヲ重ク其父ノ

死ヲ顧ミス或文ニ愛父母過死我者不宜乎我愛子女

過死我者不宜乎我也不任其十字架而從我者亦不宜於我 又蓋我來使人疏其父女疏其母婦疏其姑而人之敵即己之家人也ノ句ト同意ナリ 甚哉_一教師我邦人ニ害アルコト教師巧ニ宣説スト雖如何_一之ヲ蔽フトヲエシヤ

七日 一字ニ所人解ノ者來ル三字ニ口士分二人來ル此内一人ハ

学校ノ教授役ナルカヤ所白金屋ト申ス宿屋ニ任居_一姓ハヒゲトカ申ス由リヤムス此日此人ニ書状ヲ遣ス此教ヲ信ス_一人也ヤ否ヤ未知

○此日教師曰コノ頃ノ寒サテハ貪乞ノ者嘔苦シニセリカラ食物ヲヤリ度ト思ニス日本ノ法ハイカ致シスル余曰ソレハ潔好ノ思伴テニガル然シ大坂ノ貪人ハ長所ト云

処ニ居ニスカ千人ヤ二千ノ古又テハナヒソレニ寒ヒ旬
施シテラハ千両モ二千両モ入ニセウ尤モ施行ヲ致ス
時ハ戸口ニ乞食施行ト札ヲ出シスソレモ御役人ニ届
テイタサ子ハナラヌ又大分年数カ入ニセウ教師甚
困惑ノ躰也

○此日祈禱ノ文ヲ記ス云々祈禱ノ文ハ一定セス其時
臨ミ目ヲ閉テ我心ニ思フテ口ニ誦ス必ス最後ニハ

帝^ハ王^ト役人^ノ一^ニ紗^ノ人^ニ教^ヘ度^ニサリ^ニス。ア^ナタ^ノ御^カヲ^沛カ

シ^テ下^サシ。取^意ノ言^{アリ}余^亦其^後ニ^隨テ^ユテ^誦ス
誦スル毎ニ感慨痛憤スルノミ

十日先日圃園ト米トヲ与ル者來ル齡甲許ノ女三才位ノ

子ヲ携ヘ顔色衰ヘヨホドノ貧人ト見ユ寺^ト出^ルノ曰ク

私寡婦ニテ己ニ寒中ニシテ死ニシス処ヲコノ且郡

ニ救テ貰ヒシテ誠ニ余ノ至テニサリス夜ルモコナラニ

向テ御礼ヲ致シニ今日御礼ノ為ニ終リシト外傳吉

コレニ米三合ハカリ与テ婦喜テ地ニ伏ス余之ヲ見憫然

久矣然教師如是貧人ヲ惠ム其志帝之ヲ憫ノミナラ

ス亦人ヲ釣ノ術ナリ可不懼乎

○此日勿意我來致平^ヲ致^ル地我來非致平乃致興我耳

ノ句ヲ講ス意味深長ナリ然レトモ此教我邦教ニ害ア

ルコトエノ一句ニ粲然ナリ蓋闔國ノ一教ヲ奉セハ并

エトアルヘカラス然ニ若ハ神若ハ儒アリテ一教ト併立セ

ハ二道相争ハガルヲエス是興我所以ナリ吾侪西洋

各國教法ニ就テ相羊ニト古來不絶ト我國今日ノ勢ヲ
見ニ耶模天主ノ徒五六万人ニ充タバ亦教法ノ羊生ニサ
ルコトヲエザラシヤ
十日當家主挾七外ニ町人一人來ルワリヤムス礼拜所ニテ
面會但ニ外ノ町人ハ先日挾七ト同リ来リニ者也

日記

十日日曜日也説法如常

十一日當家主挾七及商人躰ノ者一人來ル

十番学校詰ノ人トオホシキ帶劍人來ル

十七日士分一人來ル

○ウリヤムス近日神戸ニ行積リナリ

○近日学校ヲ侘リ積リナリ十一オヨリ十四迄ノ者只

今十一人約束イタセシ由今四五人ヲ得度トノ咄ナリ○

但シ礼拜所ノ傍ニ寮ヲ立テ二字ヨリ四字迄ノ間英学

教授スル由ナリ○右ニ就白髮友橋シングウ屋敷姓何

泰三郎トカ申人ニ書状ヲ遣テ知セシ躰ナリ此人

大正十一年四月
伊澤道一



元トウリヤムスニ和語ヲ教ヘシ人ニテ此節学校ヲ開
ニ兼テ周旋イリテセシ由ナリ。○エノ学校ニ來ル人々最
初金一兩ヲ出サシ察ヲ立ル入費ニ充テ夫ヨリ後ハ支シ
テ謝金ヲ取ヌ由ナリ。○其入門ノ子共ハ少シニテモ蘭
弗善ヲ学バザル者ヲ好ナリヨク音ヲ正シテ教
授スル由ナリ。○尤モ荒涼ニ噂スレハ多人数來ルヘシ
左アリテハ官ノ学校ニ對シテ恐アル故十五人ヲ限テ
入門ヲ許ス由ナリ。○右ニ件テ子共ノ引立ヲ致吳ヨト
余ニ頼入シコトナリ。

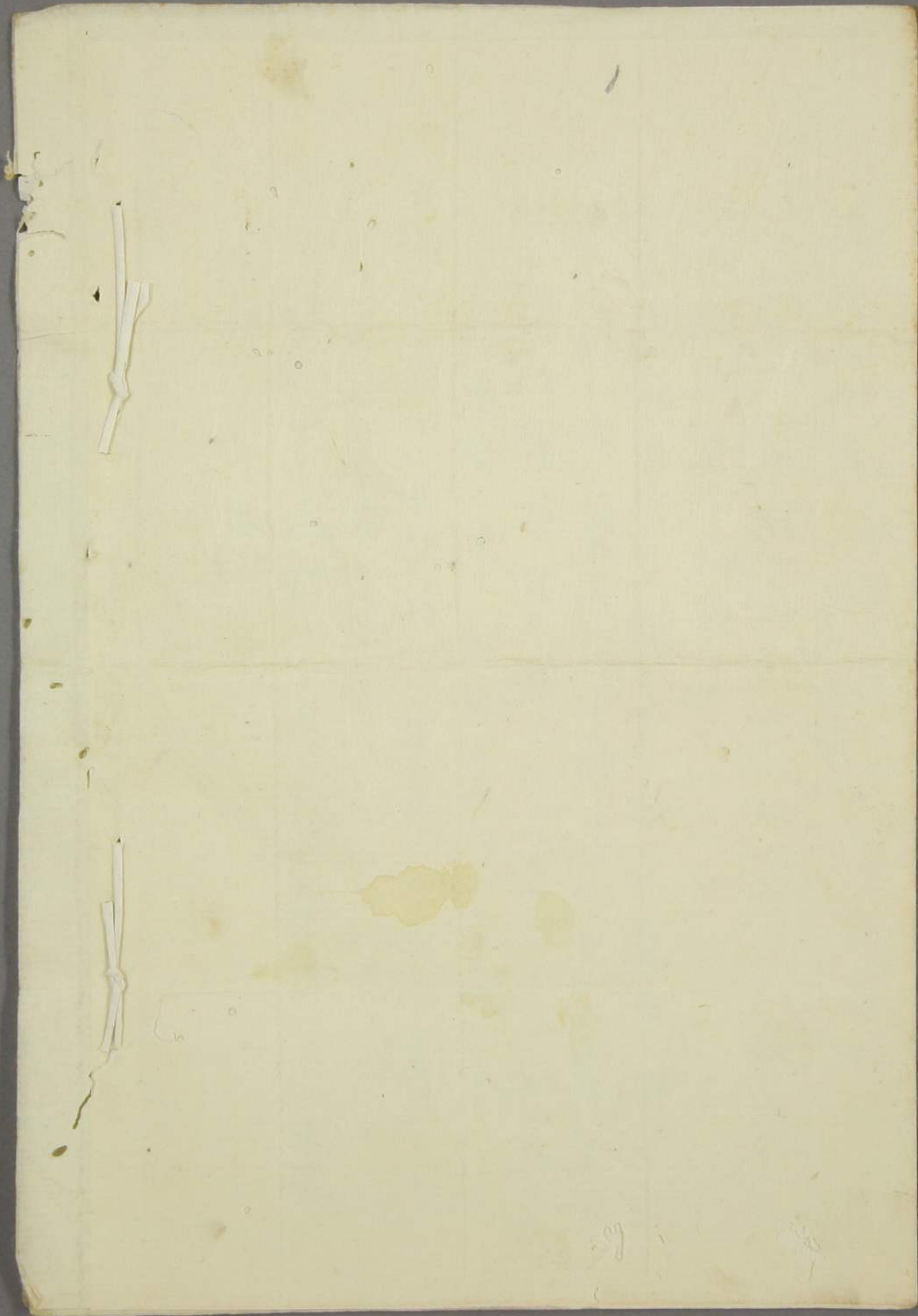
○來春ハ醫者一人來リエノ館ニテ施藥ス由ナリ夫
就醫者ノ居間寐間ノ普請近日取掛ル由ニテ十八

日大工ヲ呼テ相談イリタス

○外務局詰ノ人時ニウリヤムスヲ來訪スル由長崎
ノ人ナルヘシ未知其姓名

○彼天主教ハ當時歸向ノ者多クケレトモ皆春蠶々ノ徒也
此耶模教師ハ期スル處甚遠大ニシテ教ヲ中人以上
施シ或ハ幼稚ニ學術ヲ施シ遠ニ其心髓ニ染着セシ
メント欲ス或ハ醫術ヲ以シ或ハ金米ヲ以ス千計萬謀
莫不盡若如是ナラハ数十年ノ後ハ必闔國ニ弥論シ
不可挽回ニ至ラン可悲ナリ

十九日日曜日也如例説法祈禱ス。○十二字ゴロ川崎ニ住スル
横濱人外國人ト同伴ニ來ル



十二月

廿日ヨリヤムス神戸ニ赴_ル廿二日歸坂

廿一日ヨリ普請イラス此ハ醫者ノ部屋及子共教授

舎ヲ造ルナリエノ子共教授ノ一ハ當家主木綿

屋挾_七任居_カ屋所_カ及姓何奉之進_{白髮橋}シニリウ之

周旋也_三ノ奉之進ハ往年ヨリヤムスニ和語ヲ教へ

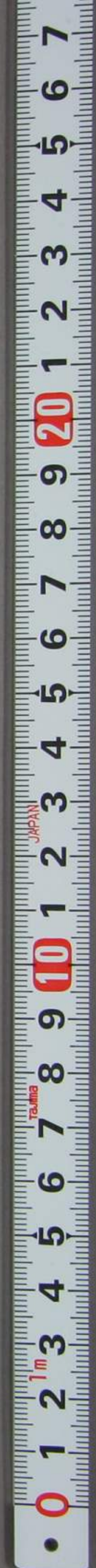
上海ニ同行シタル由極テ親交ノ人ナリ

廿四日官負トオホシキ人三負家來一人ヲ連レ來ルニ

人ハ四十余齡一人ハ七余齡ナリ

廿六日安息日也説法祈禱如例川寄住居ノ横濱

大正十一年四月
天隈侯爵寄贈



人來ル此ハ安息日コトニ欽ルコトナシ頗ル厚信ノ人ト
見ヘタリ造幣寮ノ人ナルニ當館ニ初テ來ルハ
十月中浣ナリ其砌横濱ヨリ添書ヲ持來ル由也
○此日神戸住居嬉野鼎甫來リ二泊ス此ハ長寄
子寫ノ醫者ニシテ往年ウリヤムスニ和語ヲ教ル者也
此外長寄柘苜シフリヒ所嘉セト申者モリスニ使ハ
レタル者也日美濃吉ト申者神戸住ウリヤムスニ使
ハレタル者ナリ何レモ時々來ル教師ニ屬スル者且
ク拜セタルコトヲエス此等モ定テゴフトヲ拜スルノ
徒ナルヘシ
廿九日恭之進親子來ル齡五十余才悻十八九才當時
蒸氣船ニ乘ル由也

壬申年四月二十三日

日記

大正十一年四月

一カリヤムス當月下浣渡唐ノ由ナリ

一近日米國ノ醫師來テ施術ノ由ナリ臘月下
旬ヨリ其居間ヲ造作ス

一十三日ヨリ子共教授ヲ初タリ只今ハ負數七
人ナリ追々十五人ニ充ル由ナリ旧臘下浣ヨリ
寮舎ヲ造作ス

一大坂白粉髮橋シンクウ屋敷住居

姓何 泰之進

此ハ先年ウリヤムスニ和語ヲ教ヘ上海ニモ同行



シタル者ナリ 齡五十余文、エノコロ蒸氣船ニ架リ
申尊リ、時々來訪ス、今度教授寮ヲ伺ニト
ハ此人及當家主木綿屋挾七、周旋也

一古川二丁目

自元ハ教師ニ借シ當時駕籠屋所ニ住居相庭
ヲ業トスル歟

某

此ハ齡卅四五ノ商人挾七ト何ゾモ同伴ス西人共
約書ヲ聞
一造幣寮住

某

齡七四五ニシテ初來ルハ去十二月中浣ナリ横濱教師
ノ添書持參スル由ナリ日曜日トシ外國人ト同ク
説法ノ坐ニ列ル頗ル厚信ノ人ト見ヘタリ余教
師ニ伺ニ横濱ノ人ニシテ金ヲ造ル者トイヘリ

一長寄子寫醫者

嬉野島南

當時神戸ニアリテ和語ヲ教ニ此ハ先年ウリヤ
ムスノ師也去十二月來訪ニ泊ス

一同松苗シツクヒ所

賄者傳吉

十三年以來ウリヤムスニ隨テ
頗ル厚信ノ者ナリ

妻駒

一曰

美濃吉

一曰

嘉八

此モウリヤムス及モリスニ隨ヒシ者ニテ時々傳吉ヲ尋來ル凡教師ニ隨者エワトヲ不拜ヲ得ス此等モ其徒ナルヘシ

一曰ノ頃專ラ祈禱ノ文ヲ翻譯ス定テ上海

ニテ上本スルナルヘシ余日々其手傳ヲ頼ル

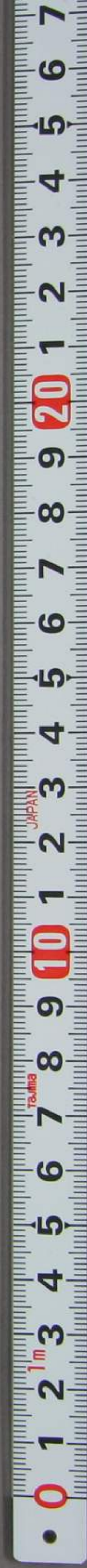
成就ノ上言上スヘシ 巳上

申正月十七日

伊澤道一五

日記

壬午年
八月



大正十一年四月
大隈侯爵家寄贈

一四月廿七日三書生來テ約書ヲ聞此ハ舊土佐屋敷
雇入ノ美國人ヘイスノ門生ナリ三月頃ヨリ時々
來ル教師モリストヘイスト誥合セシト見ヘタリ
近來教師ノ状ヲ察スルニ外國人ニ付屬スル者ヲ
勤テ誘度由ナリ又時々造幣寮ノ英人キン
ドルト互ニ往返スヨノキンドルノ宅ニ礼拝所ヲ設
ルナルハシ
一廿八日曰此頃黒田ト申人々蝦夷ノ役人ニナリテ
切支丹ノ徒ヲ獄ニオキシ由ナリ何ツニテ日本ハ

如是トテヲ致スカ今度西洋各國ニシテ受テ
岩倉卿ニ迫ルテ有テト云テ甚憤慨ス

一廿九日川寄住英人小兒ヲコレ来テ洗礼ヲ
受ル

一五月朔擬泰西人上書ノ新聞誌ヲ一々講説大
大ニ飲ヘリ

一五日曰洗礼ハ耶糞ノ寶血ヲ以精神ヲ洗ナリ
聖書ニ保羅曰人死ニテ躰ヲ地中ニ埋カエトリ
洗礼ノ時ハ身ヲ水底ニ没スヘシ此ハ耶糞ノ死

ニテ肉身ヲ土ニ置ニ習フ後ニ水ヨリ出ルハ耶糞ノ
糞生昇天ヲ習フト云ヘリ凡洗礼ヲ受ルハ死
ニテ再生スルノ形ナリ各人従前ノ所作諸鬼ニ
事テ真神ヲ不知放ニ神ノ十誡ヲ犯ス然ニ深
ク罪非ヲ悔テ耶糞ヲ信スル時其罪身ヲ棄
捨ニ更ニ天神ヲ身躰ヲ賜フ故ニ聖餐ヲ受
ル時餽ハ耶糞ノ肉ナリ酒ハ耶糞ノ血ナリ耶糞
ノ肉ト血トヲ己カ躰トス己実ノ生天ノ徒ナリ即
聖徒ナリ今西洋ニ何々堂内ニ小池アル処アリ洗
礼ノ時ニ池ニ投ス然ニ寒國ニテ凍死ノ恐アル故私

共ハ少ク水ヲ頂ニオリヨ礼トイタスナリト云
然則皇國人ノ洗礼ヲ受ル者ハ御國神ノ後裔
タル身躰ヲ棄捨シ更ニゴツトヨリ依身ヲ貫ヒ
彼耶稷ノ血ヲ以我日本魂ヲ一洗スルナリ之ヲ
快トスル者ハ愚ト云ハシカ狂ト云ハシカ可惡之太甚者也
一八日回支那人千ニシニサンノ事ヲ語ル此ハキヤシク之
ツウチヤウト云処ノ人ニシテ博學ニシテ佛ヲ信ス支
那戦争ノ砌逃テ上海ニユリ上海在留ノ耶稷教
師流亡人ノ為ニ多ノ家室ヲ設衣食ヲ給ス千ニ

シニサン 遂ニ純信ノ徒トナリ今コシワシ之教師トナル諸
民大ニ歸服スウリヤムス一冊ヲ著シテ此事ヲ記ス
且曰余カ支那ノ儒書佛書ヲ讀ハ皆此人ノ力也
ト大ニ賞美セリ今我邦ニモ飢饉疾病等ノ災
アラハ教師之ヲ機會トシテ教法ヲ布ニト必セリ
狡黠可怖ナリ
一四月中 嬉野 島南 神戸ヨリ來ニ時神書ヲ贈
ル一ヲ教師ニ約セシ由ナリ 余未見之
一十日 上海住 美國女教師 アエイ 數十ノ稚兒ヲ
集約書ヲ授ノ圖ヲ示ス 此ハ支那人ノ貪宥

人杯ノ子ヲ買取テ教法ヲ授ル由ナリ

五月十日

伊澤道二

浪華日記

千重二リオオエ
方集



大正十一年四月
大隈侯爵郵寄贈

一 二月二日ウリヤムス上海ニ赴シヨリ以來更ニ來ル人ナシ
窟中日々寂寞ナリ偶來ル者ハ家主挾七ノ三ナリ
僕傳吉夜々約書ヲ聞禮拜甚勤ハ日曜日コト
十誠信經等ヲ誦誦セシム此傳吉ナル者事ニ觸
テ餘道ヲ悔リ誹謗スル甚シ余屢憤怒ニ堪サ
ルコトアリ然レ傳吉ニ不局我等モ亦エノ教ヨリ他
道ヲ見ル時ハ偶像教又我固有ノ道ニ於テ輕悔
スヘキコトアリ退テ我ハ是 御國ノ男兒
天祖ノ赤子ナリト顧ニ志ヲ勵テ所禦ノ念ヲ生スル
ノ三

況ヤ傳吉此教ノ外餘道ヲ不知其輕悔スルコト宜以
何トソ此等ノ徒蔓衍セサルヲ祈願スルノミ

一モリス朝六字ニ起寢所ニ於拜シ夫ヨリ部屋ニ於拜

シ八字ヨリ和書ヲ讀ムノ時亦拜ス其言日本弘

教ヲ願フト甚切ナリ 二字ヨリ四字迄子共教授

夫ヨリ一字間遊歩夜七字 余ト傳吉ト三人禮拜夫

ヨリ十一字迄日曜日説法ノ牒安茶一席説諭六夜

間思惟剛補ス其教ヲ重スルコト可思ナリ日々ノ所

行十誡ニ當ト思ヘリ 目ニ婦女ヲ見ス口ニ戲言ヲ

吐ス勤テ人ヲ愛ス和書ヲヨミ通セサル処アリ

閑テ黙禱ス行任坐卧基督ヲ敬崇シ作シ黙々天

神ヲ倚頼ス謂ル耶鉄教師ノ名アリテ実アルモノナリ

ソノ自教ヲ護持スルノ志感スル餘アリ 余恒々

コレヲ羨ム又其節儉ナルコト可笑様ノコトアリ此

弘教ノ為ニ更ニ費ヲ顧ミ去冬貧人ヲ惠成

教授寮ヲ建ル等ニテ知之御國ノ教師ト相及スル

モノナリ 余思ニ御國ノ教師ヲシテ渠カ如ナラ

今ハ國體ヲ確守スル何ノ難コトニアラシ

一ワリヤムス曾云日本ニ漢字ヲ用テ大ニワルシ六七

年漢字ヲ習者未ク其意味ヲ知ス洋学ハ七年ノ

間ニ字学語学数学理学ニ達スヘシ 近來日本モ
外学カ大ニ開クニ追々一般ニ改テアロフト文明ノ
化ヲ悦喜スル甚シ 余察スルニ教師ノ志區々トシテ一人
二人ヲ引道スルノ意ニアラス 追テ全國ニ教法ニ改
メ懸筆也

一 余モリスト語リ各國和親ノ事ニ及モリス曰私早ク日
本語ヲ覚ヘ子ハ追付路ニカケタル 旋ノ礼ニトシテ皆
ノ人ニヨリ教ヲシラセニスコトカアリニセリカテヨリ
日本語カテキスルニ教ルコトカテキヌト云ク

余曰アソコ方ハ莫大ノ金ヲ費テハルク 日本ニ渡リ

一 シタカ只今見ルニ 日本ノ人ヲ教ヲ聞者甚クヤ
夫テハ在留ノ新註ニヒ様ニ思ハレルモリス曰ト云ノ
國モ初ハヨリ通アル又帝役人カテ教ノ人ヲ殺
ストモ沢山テアル是ハ聖書ニ申テアル故ニ 抑ニアル
ハズ然レ後ニ其帝役人皆ノ人カ罪ヲ悔テ信
シテ是ハ私共ソノ抑ノ人ヲ信シサセルトハテキニセ
又ケレ天ノ神カ御手傳下サルニ左抑ニナリニス
日本モ追々信ニセフト云ク

竊ニ思ニ方今ノ急務西洋ヲ開ニアルコトハ皆注目
スル処ナリ然ニ渠等文明進歩ノ機會ニ架シ我

國体ニテモ毀廢シ儘卅ノ民ニ耶糶代贖ノ恩ヲ
布ントス嗚呼一得アレハ一失アリ杞憂ヲ抱ノ徒進
退茲ニ窮レリ

約書曰凡為我名而離屋宇或兄弟或姉妹或父
母或妻子或田疇者必受百倍且嗣永生

又曰爾師乃一即基督而爾曹皆為兄弟亦母稱
在地者為父蓋爾父乃一即在天者亦受師之

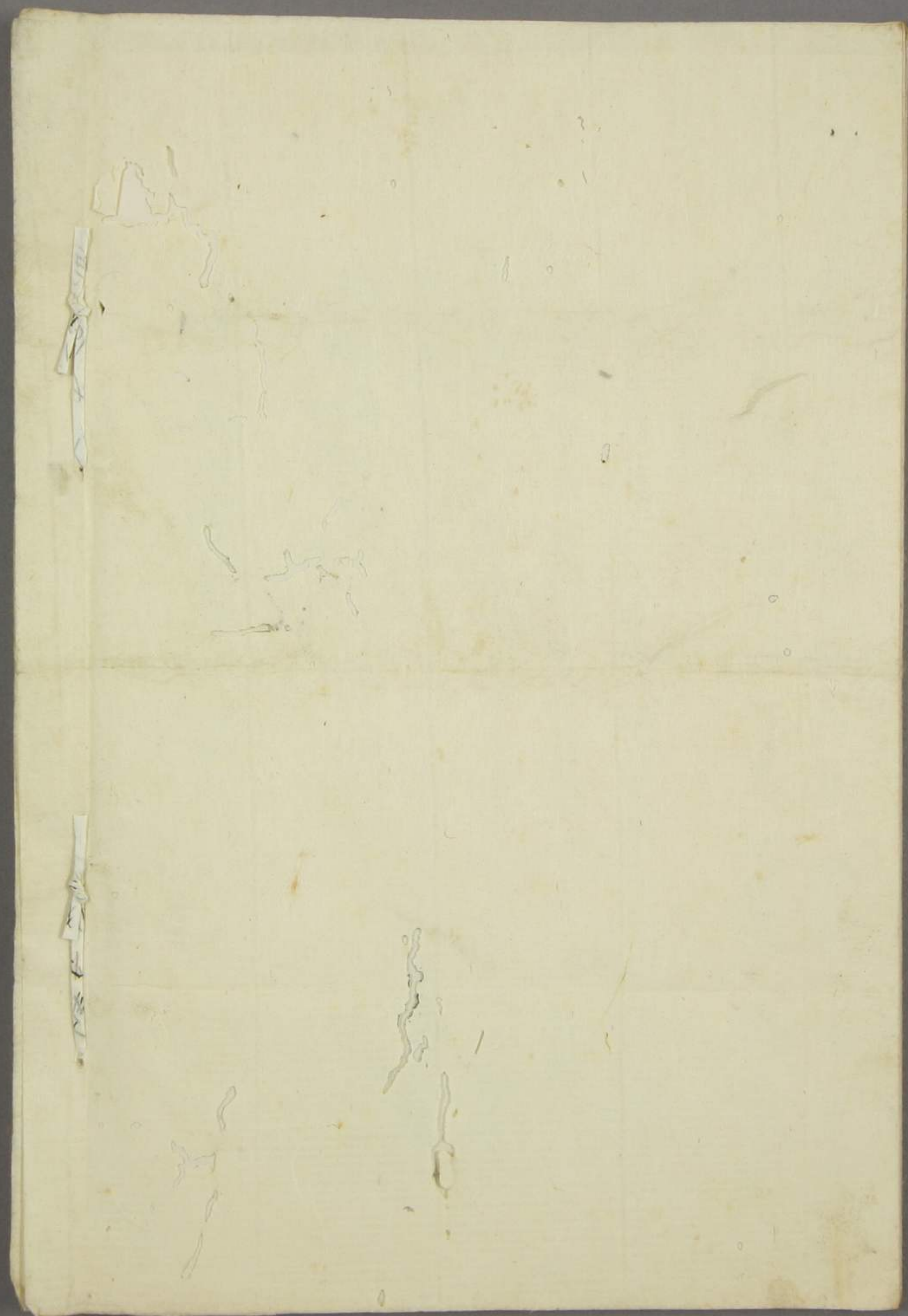
稱蓋爾師即一即基督爾中之大者特為
爾僕 大者トハ一王様
ヲサス歟

我神人唯一古今一系ノ國体ヲ重スル人此等ノ文

於誰江淚切齒 セサレヘケニヤ

壬申二月

伊澤 三



日記

千七百三十三

1733

方設



大正十一年四月
大隈侯爵郵寄贈

二月廿七日基督ノ死日也西洋第三月最後ノ金曜日ニ當
ル此日信徒會集ス此ヨリ三夜間基督ノ死及糞生
ノ事ヲ講ス十字架ノ苦ヲ語ル時教師涙ヲ催シ嗚咽ス
聞者ヲレテ亦哀ヲ催サシム教師ノ基督ニ於ル實ノ父母
ニ於ルヨリモ親シト見ヘタリ

一馬太傳七十八章ニ基督糞生スル時初ニ基督ノ罪ヲ訟ヘシ
祭司諸長大ニ怖テ墓ヲ守ル兵士ニ金ヲ与テ曰ク爾如是
云ヘシ私共眠リシ内ニ門徒共其尸ヲ盜去リシト夫ヨリ猶太
國ニ流言シテ基督ハ實ニ糞生スルニラス其門徒共尸ヲ盜
シト只今ニテ傳ヘルト云ク此等ノ説甚淺陋ナリ糞生昇

天ノ説彼徒ノ虚誕ナルト可知ナリ又基督開口必死ヲ云
為義遭迫害者福矣以天國乃其國也等ノ文是ナリ
逆ヲ謀ル者ニツ死ヲ誓テ人心ヲ固スルニ似タリ凡ソ基督
生存ノ間一處トシテ安適スルコトヲ得ズ逆ニ衆人ニ訟ヘラレ
面ニ唾レ槌レ十字架ニ釘死ス其十二大弟子猶太ハ師ヲ賣
テ其身モ縊死シ彼得ハ羅馬ニ於頭下足上ニテ十字架ニ
釘ル其餘九人亦処々ニ刑殺セラル只約翰一人僅ニ刑ヲ
免ル餘道ノ徒未タ如是ナルヲ見ズ謂ル教ハ化ナリ聖人
教ヲ垂テ世ヲ化ス何リ死ヲ云テ人情ヲ結ニ及ンヤ苟
正教ヲ施ス何リ到处戮刑セラルヘケニヤ教之邪正此ニテ

知ラレナリ

一同曰在天在地諸權已悉与我矣故爾往招萬民為徒
馬可傳曰爾曹往普天下傳福音於萬民信而受洗
礼者得救不信者定罪信者将有奇跡從之即批我
名逐鬼將言異邦言操蛇或飲毒亦無害按手治病
者病必愈是ラノ文何リ自恣ナルヤ基督十字架ニ
釘ル所以也是ヲ妖術賢者、彈斥セラル所以ナリ又
異邦ノ言ヲ言何リ基督ノ恩ニ悞ニヤ可笑太甚モノ
ナリ

一七三日教師曰私聖書ヲ書林ニ賣セ度ト思ハスアニリ

新齋橋ニ行テ相談シテ下サレ余曰エノコ新タニ書物
ヲ賣時ハ役人ニ見セテ其許ヲ受子ハナラ又曰左袂
ナラ休セテアシタノ朋友ニ聖書ヲ見度人アルナラヤ
リセテ又御度ナラハ晩ニワレテ清イテナサレ云々頃口
類ニ催促ス

一七六日朝教師ト共ニ拜ス庭掃除ノ童僕之ヲ見ル教
師駭テ曰アノ人アリタノ拜ハモトヲ役人ニ申シテナラハ
縛リハイタサヌカ又役人ガ私共ノ教ヘルコトヲヒソカニ
吟味ハイタシセヌカ余曰エノコ何モケモ外國ヲ学ニス
コノ教ハカリ吟味スルコトハアリヌコト更ニ氣便ナサヌヨイ

一三月二日曰私子共ニ英語ヲ教ニスハ何トゾ天神ノ道ヲ
授度ユヘテアル頃口木林或ハ生病氣見舞ニ行テ親ニ
逢度ト思ニシタレドモ親ハ居セヌ此ハ外ノ子共ト一処ニ
居ヌカラ定テ親ハ居ラスニアル役人ニ付テ大坂ニ学向
ニ來テ居ト思ニスソナラ聖書ヲ教ルコトヲソノ役人ガ
嫌ニセテドヲソ親共ニ逢テ相談シタイモノテアル
近日少ク教ヘテハイカニテコサリセテ余曰此難有教
ヲ授ルナラハ親々ハ喜ハフデアル然レ何ヲ云モ制札ガアル
故親々モ心配イタシセテ何分アシタニ付テ英学ガ
出來ニスレハ一生アシタノ思ハ忘セヌ只今聖書ヲ教ルヨリ

英学テ育テルカ却テ後ノ為テゴザリセフ曰コトニ
左様テアル然レ或人ノ咄ニ日本人ハヨリ師ヲカヘルト云コ
トテアルアノ子共モ聖書ヲ教ヘ内ニ外ノ先生ニ付ナラハ
残念テゴザリニス私ハ英語ハカリ教ルカ所詮テハナヒ云レ
余曰只今大坂ニアニタヨリヨイ英学ノ師ハアリニスヒ
初ヨリ教師ニ付テ学エトハ甚難ヒコトテアル左様ナレバ
コトヨリ外ニ行コトハゴザリニスヒ云レ 翌三日エノ事ヲ
ウリヤムスニ出牧ス

一余尙教師ニ階級アリヤ曰ビシユブフリーストリケニスノ
三級アリビシユブハ教師ヲ監察スル役ナリ此ハ数ヶ処ヲ
カケ持スル故ニ定テ家ハナヒ 美國ニ四五十人アルヘシウリ

ヤムスガビシユブナリ百四十五里間ヲ支配ス寺ハ日本ノ寺
ヨリ大ナリ聖日ゴトニ堂ヲ開テ説諭ス又小邑ニハ平家ニ
礼拝所ヲ設平人ノ信徒教授スルコトアリ只今川寄
ニ英人ガ自定ニ礼拝所ヲ設テアル様ノモノテアル云レ
依テ思ニ川寄住居横濱人去冬才一日ゴトニ必來參セリ
正月ヨリ遂ニ來ラス定テ其部屋ニテ礼拝スル歟
一尙信徒死セントスル時教師病家ニ至リ教ルコトアリヤ
又与ルモノアリヤ曰教ルコトアリ又寶血ヲ授ルコトアリ
馬太傳曰耶模取餅祝而辟之与門徒曰取食之此
乃我身也又取杯祝謝而予衆曰爾皆飲之蓋此乃
我新約之血為衆而流以致赦罪者也ト依テ教師

病者三向一飯ト水トヲ授リ乃基督ノ寶肉ト寶血トナリ

三月

伊澤道二五

藏書目錄寫

摩西五經	約百列雅歌	約書亞到以士帖
以賽亞到馬拉基	舊約全書	新約全書
創世記到出埃及記	詩篇	馬太傳福音書
馬可傳福音書	約翰傳福音書	使徒行傳
使徒行傳至約翰默示錄	聖書安息日撮要	聖書也或撮要
聖書氣戒撮要	聖書財戒撮要	聖書五倫撮要
聖書酒戒撮要	聖書五常撮要	聖書五倫撮要
辟奉偶像解	福音之言	耶揆之言
真神十誠主祈禱文信經		登山寶訓
羅馬到默示錄	馬太合英話	真神十誠
馬太傳	馬可傳	路加傳

羅馬到哥林多後書 加拉太到默示錄 新約書羅馬字
 創世記出埃及記羅馬字 以賽亞羅馬字 馬可傳略各解
 便徒行傳註款 舊約史記條問 馬太福音問答
 舊約史記問答 福音道問答摘畧
 耶模教要理問答 耶模要理大問答 聖會勸懲條例
 信道摘要 教會政治 天道溯原
 天路指南 神道總論 宜道指歸
 聖教類書 聖書衍義 聖教圖記
 耶模降世傳 耶模言行綱目 御訓
 張遠而友相論 喻道傳 三要錄
 雙十字文 保羅垂訓 救世要論

天牖二光 祀先辨謬 棄假從真轉禍為福
 信操三光 祈禱入門要訣 真理易知
 耶模教例言 耶模教要旨 悔改信耶模說畧
 西土來意畧論 勸解鴉片論 真理三字經註解
 靈魂貴於身體論 靈魂總論 初學編
 論復新之理 小祈禱文 救主耶模
 罪人得赦之法 花園單張 耶模降世言行韻文
 奉勸真假人物論 耶模教例 靈魂篇
 約瑟言行全傳 以利亞言行傳 耶模教畧
 論善惡人之死 真理三字經 真神總論
 耶模竹徒金針 舊約節錄啓蒙 訓兒真言

天道湖原直解
亨利實錄
正道啓蒙
耶穌為誰
柔翰再生記
讚美詩
審判日脚
喜讀聖書小姐
請到耶穌地芳來
尚百孝子父子算帳
花圖書

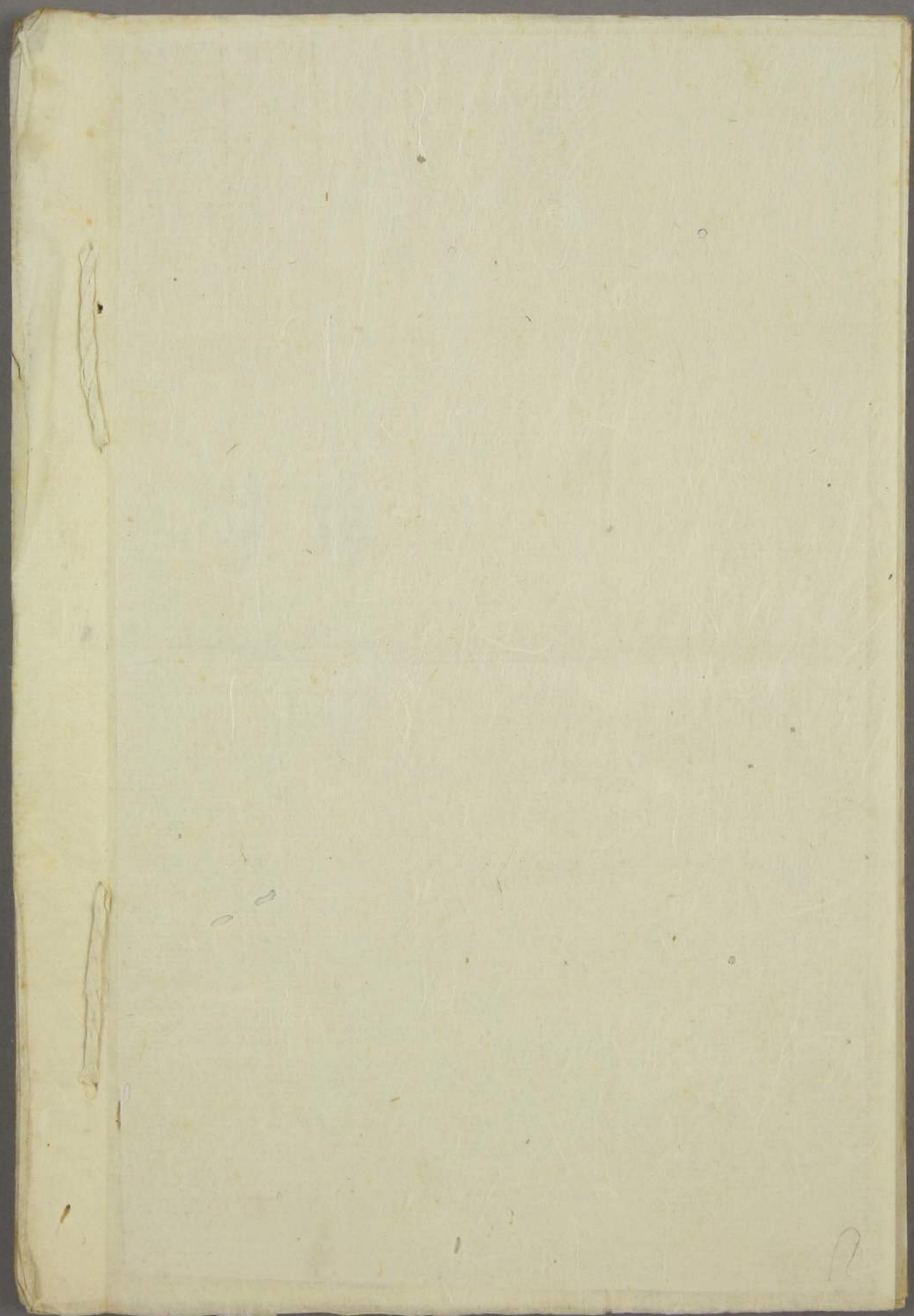
天路歷程
頌揚真神歌
耶穌教問答
西國樂法啓蒙
醒世良言
曲譜讚美詩
趁早預備
日脚長拉裏
士話初學
臨近問答
地球畧說

續天路歷程
婚喪公禮
孩子受洗論
長老論
淺白禱告文
撒庇書
剛担去士
日積月累
小頭理
朝廷准行正教錄
聖諭廣訓

文學書官話
心算啓蒙
教會新報

通計百三十五部

+



日記

壬午八月二十日
未五十五号

大正十一年四月贈
大隈侯爵

小池



一ウリヤムス六月十二日支那ヨリ來着ス其後生徒ノ訪
來日々兩三眞土佐人尤多シ此ハウリヤムスノ親友
美國ヘイス元土佐屋敷ニテ洋学教授スル故ナリ
日々ハイブルヲ習讀スル者一人アリ土佐人未^知其姓名
其餘ハ信仰ノ徒トハ見ヘス余思シ生徒ナトハ後世
靈魂ノ浮沈ニ心ヲ留マト究テ難シ窟^ニ出入スルモノ
多ク浮薄ノ徒洋人ト詆論ヲ喜ビ一時好奇ノ徒
ニレテ實ニ宗教ヲ信スルヲハ難カルヘシ然レ教師
百方計畫遂ニ深坑ニ陥ニモ難知今當テ十分
防禦ノ策確立セバ容易蔓延イタスニシキ歎

一ウリ曰方今日本人勤テ文明ニ進外國ト抗立セ
 欲ス然ニ古在ノ文字ヲ廢シ亦六ノ蠅行字ヲ用
 ルニ非レハゴト文明ノ域ニ難至當路ノ人ヨクニ着目ス
 且友人某曾テ支那國神佛ニ供ス燭燭香花
 金銀紙ヲ算ス支那人佛ニ參ス人ゴトニ行ヲ點シ金銀
 其費巨万日本亦然リ近リ長寄ノ盆祭神事躍
 其外京松苗祭大坂天神祭スヘテ神佛ニ付ノ費
 宛算ニタヘス日本人實ニ富強ノ術ヲ行ニト欲セ
 断然是等ヲ廢スヘシ云々ヨリ咄方今ノ人情ニ近シ
 以思ニ區々トシテ一人二人ヲ誘ハ渠等素心ニヤラス
 大ニ開化スルヲ待テ神州ノ全躰ヲ一洗セントス其大志

根柢カ尤可懼ナリ

- 一横濱教師ノ會合タムソシヨリ申來ル
- 一不日禮拜堂造立ノ由ナリ
- 一教師ギヨリキ 与力町ニ来リ任ス書生ニ負アリギ
ヨリキ 老功頗ル狡黠ナレドモウリニ比況スベカラス
- 一ウリキヨリキ 西京関只控ヲ呼下サントシテ數コレヲ
促ス過日ウリ曰 関氏ギヨリキヲ周旋セシヨリテ京
都徒人禁足セシ由ナリト云
- 一教部出張諸寺ノ演說ウリモリス往テコレヲキリ歸
來テ余ニ三則ヲ語ル精細駭ニタヘタリ

一ウリ曰聞ヲ本僧客歲洋行シテ耶稷教ヲ探索スト
信ナリヤ曰不知ウリ曰願ハクハ日本神佛ノ徒多ク洋
行シテ外國ノ事情ヲ見教法ヲ聞ヨガレ遂ニ從前
ノ北ヲ悟リ聖教ニ歸化セン歸來テ聖教ヲ本邦ニ布
カハ日本ノ洪福吾等甚ニテ希フ云々

一嬉野鼎甫 君^ヲ尋ト段告ス 神戶租稅寮出仕當時大
坂詰^{ナリ}教師ニ神書ヲ贈ル

一ウリ 信經向答早禱文等ノ著書ヲ當地ニテ上木ノ
ツモリナリ再治未成時々余ニコレヲ示ス余不得已
其是非ヲ論ス

一今月ヨリ聖日ニ日本人ノ公會ヲ始ム余ニ語テ曰土佐屋敷
ノ人聖日ニ來會スルモノアリ然共外國人ト同列シテハ
講説キ・エガタシ今ヨリ公等ト午後ノ公會ニ同列セン
ナント欲ス余曰兄弟ヲウルト喜ニタヘタリ然レヨク其
人ノ信不ヲ考ズニハ他人ニ漏洩スルノ患アラシ僕傳
告曰コソゴロ探索スル者アリト聞余人ト公會スル
甚ニ恐怖スヘシ依之土佐生ヲ招コトヲ止故ニ公會ノ
彼^ニ屬罔榮 余呼上セリ者傳告及妻ト余ト四人ナリ
一教師今月初ゴロヨリ官ノ^ニ探索人アリトテ夜中
人出入ヲ嚴禁ス余ト傳告ト出入ノ人ニ心ヲ附シム

余 精ニ恐ル

七月廿六日

伊澤道一五

申
あひあひナラ

浪筆出酒

伴天通一

大正十一年四月
大隈侯爵邸寄贈

一横濱ニ於教師會合ニ付タムソニヨリナリヤムニ
ヲ屢促來ル然ニキヨリキヲ大坂惣代トシ
テツカハシナリモリス共ニ出會セズ但シナリハ
礼拝堂創立又ニ諸翻譯ニテ甚多忙ナリ故
頃鏡意ニ和学ヲナススベテ翻譯ハ心学道
詔ノ躰ニ習ヒト欲ス

一ナリ曰横濱ニテ諸教師ノ課ヲ分チテ私ニ新
約書ノ和訳ヲアテシ由ナリ私ハ急ニ信經
尙答 坚信礼 耶稜教要訣 ナドヲ譯出シ度
ト思ヒスト云ヒ



一上海住米國教師子ルサン 其子ヲ携日本
 巡遊ノ為ニ八月八日着坂日十音 横濱ニ赴
 入西京ヲ願ヘトモカハス
 一ウリ礼拝堂ノ地面見込ノ場所借用カ六
 ス大ニ落膽ナリ
 一十五日 キヨリキ グリン テヘー ス 横濱ニ赴
 同七五日 スタウト 横濱ヨリ 長寄ニ 歸路ヲ
 リリヲ訪テ キヨリキ 等ハ未歸
 一十三日 制札ノホ一二條ヲ書シム
 一ウリ 歸リシヨリ 生徒ノ出入甚多シ 近來

日々ハイフルノ稅目古ヲ初タリ

渡辺松民 事務局出任

岡又三郎 小田縣ノ人大坂舟越所川竜
ト申 宿屋ニ寓ス

種寫三七 鹿兒島縣ノ人大坂千代寄橋
松実奈良三ニ寓ス

山田小太郎 山口縣ノ人大坂土佐堀二丁目
分道屋好三郎ニ寓ス

已上時尅ヲ定テ習讀スニ余時尅ヲキハメス
 来ル者多シ 拾集セハ十五六頁ナルヘシ
 一亦八日夜ウリ曰只今日本人ニテ英学ニ志ス故

私学校ヲ開ナラハ入門生徒究テ多カルヘシ最モ
月謝ハ取ニスル幸ヒ上町開成所ニ英人
ニリララド之学校明テアルニ彼ヨリテ近日
初メ度ト思ニス昼ハ英語ヲ教ヘ夜ハバイブル
ヲ授ベシ次頃横濱ノ咄ヲ聞シ信徒五十
人ニ充ル由ナリ大坂モ是ヨリ繁昌スル致
度思ニスアニタモナク午傳テ下サレト云シ
抑ナリヤムスハ為人温和ニテ博學ノ名アル故生
徒渴望スル者甚タシ且無月謝ニテ教授スル
時ハ開成所ノ書生或ハ官負入門スル者必多

カルヘシ生徒初ヨリバイブルヲ信スルニ非レトモ教
師ノ狡猾ニ心酔シ且教法ノ要理ヲ聞却テ日
本嚴禁ノ御政度ヲ怪ム者タシ且其説ヲ
聞シ宗教ハ
朝廷點評ノ思召故ニテ弘モ害ナレト云ヘリ
一或生曰福澤氏曾テ西京ニテ知參事ニ對シ外
國教法ノ美ヲ語シ一同高議ニ服セリ速ニテ
教法ヲ開國家ノ裨補ニ致度モノナリト云
一キヨリキノ它ニ江州生某アリ宗教粗心得
タリ英之助自忠藏ノ黨ナリ一ノゴロキヨリキ

横濱行ニ付 神戸ニ行テ埋伏ス 倒忠花ノ函囚ニ
ヨリヨホド恐怖スル躰ナリ

一倒忠花 東京存ニテ 函街セラレ 其更ヲキキ

ニ報知ス キヨリキ 金十両 グリン金五両 贈

遣ス 于今時々通信スル由ナリ 若脱スハ一ヲ得

ハ 直ニ空中ニ潜伏シ 大ニ腹心ノ害ヲナサン

一ウリヤムスモリス エンソヲル ベンサイノ宗ヲ

イッピスエツパル 宗ト申ス 米國ヨリ 他國ニ遣ス 教

師凡ソ三百人 其中ニテ 教師四人 信徒四人ヲ

ニエウヨロクニ 置テ 八人 米國信徒ノ 宗教ノ為ニ

差出ス 金ヲ 集諸國出張ノ 教師ニ 配分ス 信徒

金ヲ 出ス ト 或ハ一回 或ハ一万余金ト云テ 出張ノ 教師

月々ニ 其地ノ 事状ヲ 記シテ 比シテ 云テ 云テ 鑑育ト

ニ 贈ヒシエテ 管轄内ノ 事状ヲ 月々ニ 記シテ 比シテ 云テ 云テ 鑑育ト

ニ 報ス 比シテ 八人ノ 者 月々一書ヲ 著

諸ノ 信徒 出金ノ 示ス 且 諸教師ニ 示ス 故ニ 一地球

内 宗門ノ 状態 一月ニテ 知サルコトナシ 且 入宗ノ 徒

ノ 姓名 人品ヲ 記シ 或ハ 写真ヲ 載ス 宗徒ノ 多ク

出入 金ノ 多少 一見ニテ 明白ス 昨未年 信徒

ニ イッピスエツパル 宗 堅信 聖餐 之 礼 者ナリ

者ナリ

行者亦二万四千九百九十五人アリ入金ノ数ハ志

又教師ハ日本ノ神佛教師ノ如ク如ク如稚ヨリ其門

ヲ育育フニアラス十分世学ニ達シ且宗教ヲ信スル人

ヲ迎迎ビ三年間宗学ヲ為致教師ノ推挙ヲ

以ビシテアテシテ試験シ其信スルト堅キヲ見テ後

フリースト教師ノニナス年三十ニ滿テ説教ヲ

許ス由ナリ若知稚ヨリ其門ニテ育育フ時ハ已ノ職

トノ心得大ニ弊ヲ生スルニ信徒ノ中ニテ博

学厚信ノ徒ヲ迎迎テ教師ニナス也已上教師ノ由ヲ

摘署ニテ記ス

イフビスコフハルル宗

ニ三級アリ

カニビシエス

カニリケンス

カニフリースト

下級

且

毎セリ

博

日記

壬午十一月七日
中七十一号

仔

何記



右段



大正十一年四月
大隈侯爵郵寄贈

一十月廿八日ノ日記ニ或官員ト申ハ奥州二本松ノ人姓ハ
ウリウト云當時神戸ニ住ス此人ハ多年ウリヤムスニ交
リ頗ル歸依トナリ諸高官ト謀リ是非ニ恊宗スル企
ナリソレニ就ウリヤムス月之十七日東京行ノツモリナリ
フルヘフキニ示談シ信法自在ノ議ニ運ジトノ腹底也
ウリノ咄ニウリウノミナラス高官ノ人々ヲ議ヲ助成
スル人アリト云ヘリ

一米國教師醫師三負來ル十七日、横濱ニ着到ス
ウリ東京ヨリ歸ル時共ニ大坂ニ來ル由ナリウリモ
今迄ニケ月或ニケ月ニシテ支那ニ行シガコノ度ハ礼拜

堂ヲ創立シ本國ヨリ教師醫師ヲ招且自身モ更ニ日
本学ヲ初ム必大坂ヲシテ横濱ノ如クナラ合ルノ目的也
當春ハモリス一人ニテ寂寥タリレガ期年ナラスニテ教師
七員及一教師ニ付屬ノ日本人三人トシテ七人アリ此ハ
必十字架ヲ戴クモノ也此ハ外來生及天主教師付屬
ヲ加テ三十人ハ見然
皇化不潤ノ民坂府ニ住ス更ニ一歳ヲ経ハ今ニ三倍ニ
シト竊ニ恐懼ニ不堪ニナリ

一朔日ノ公會ニ二人入門ス其一ハ日々バイブル習讀スル
石鐵縣今井正算ナリ其一ハ佐賀縣江副彦平
ト申人也堂堂濱ニ目伊東祐平ニ右々此ハ長崎ニテホニサイ

ニ学ニ由也

- 一朔日兒鹿堂縣士族ニ負ヨリテ訪來ル
- 一嬉野島南時ニ同寮ヲ誘來ル
- 一造幣寮ノ官員東京人竹村某此十一月横濱
ハホニヨリ添書ヲ持來也コノ頃久ク不來
- 一米一番館ニ住ス高岡某東京人日々ウリテ訪來ル
- 一今井曰私同縣ノ者曾福沢氏ニ学今米國ニアリテ
耶模教師ニ隨ヒリ余其姓名ヲ忘失ス重テ記スヘシ
- 一キヨリキ 語学生十二三員アリキヨリキノ室ヲ

填塞ス近日更ニ寮舎ヲ脩ヘシ若寮ヲ脩公塾教
授スルヲ大ニ盛ナルヘシ
一ゴラデンニ專日本語ヲ学未タ醫ヲ弁ス

十月二日

伊澤道一

日記

五
年
土
り
十
百
の
集
大
七
十
三
号



伊
比
呂
大
塚



大正十一年四月
大隈侯爵郵寄贈

一十月廿六日神戸在留米國教師グリントヲ訪フ
教師新約書ヲ講ス生徒五人アリ余曰聽講
人ハミダケテアル歟教師曰マダアリヌケレモ今日ハ
來セヌ又大坂ノ人ハ政府ヲ恐ルソフナガ横濱神
戸ハ少モ怖レセヌ

一米國教師ハレ此ハ醫ヲ業ル頃者生田前病
院ヲ創建スル也此ハ西京人影山耕三元松山
幸三郎
隨從ス

一曰教師テハ一十月朔日ヨリ学校ヲ開由ナリ

グリーン専周旋ス 関貫造 越後人也西京関忠茂ノ
兄弟ナリ

影山耕造 早川正人 江州人グリーン
ニ遣後ス 学校ノ事ヲ

周旋ス

一 影山グリーンニ語テ曰ミテ曰ク曰藩士佃港地、飄泊スル
者甚多ク各語学ヲ志ス今度学校ヲ開語学
教授セハ入門生必多カルベシ月金ハ飯料共ニ兩
ニ歩ト定メ実貧生ニシテ篤志ノ者ハ教師ヨリ衣
食ヲ給シ学ハセハ其者成業ニシテ官負ニナリ
又ハ商客ニナル則ハ當人ハ勿論親族ニテ教師ノ

恩義ハ忘レセ又此ガ教ヲ施ノ上策ト思フス

一 関貫造 余ニ謂テ曰大坂ニ貧ニシテ篤志ノ書生アルナラハ

私ト影山トニ當テ海遣ナサレ 余曰西京ノ関忠茂君

ハ今函因ニテ居マズ 関貫造曰來月二日三日

頃ニ必大坂キヨリキノ家ニ來マズ答テアル

影山耕造 生田廟前病院ニ任ス

関貫造 西町堺目筋上ニ竹内隱定ニ任ス

早川正人 グリーンノ館ニ任ス

一十月廿八日ウリヤムスニ語テ曰私神戸ノ教師逢坂
子ヲ見ニ信徒モヨホトアルト見ヘテ大ニ羨布思マ
シタウリ曰追付大坂モ信徒カテキマス狭キ処ハ
侘ヤスヒケレモ江戸ヤ大坂ハ急ニ侘マセ又然レ侘
ル日ハ廣ヒ場所カ勝マス最其時ノ奉行ニヨリマス
神戸ノ神田ハ西洋ヲ好マスニ宗教ヲ布ヤスヒ大
坂ノ渡辺ハヨリマセ又ニ今午ヲ出シテハ宜ナヒト
思マヒ私ハ只今内ニ翻譯ヲシテ追付免シタ時
ニ侘合スワモリテアリマス又昨日或役人ト示談

イタレモシタ 教部省内ニ 宗教歸依ノ人ヲ 込入
而モ 肝要ノ処ニ オキマス ソフレテ フルベツキノ人
人 宗教歸依ノ人々 只今上ノ 役人ニアルニハ 此人ナ
ト 外ヨリ 迫リ 内外ヨリ 事ヲ 謀ル 則ハ 必 併宗ニ
ナリマス 事ハ フルベツキ 兼テ 上ノ 役人ト 謀リシ
事テアル 尤モ 上ノ 役人ニ 受洗ノ人モアリマス 私
來月ハ 東京ニ 行テ フルベツキニ 示合ワモリテアル
鬼格 日本ノ 坊主ガ 妨ヲ 致マス 甚 偏執イタレマス
三ノゴロ 京都ノ 和尚ガ 大坂ニ 來テ 説法スルソフナ
然レナカラ 上ノ 役人ハ 三ノゴロニ 却テ 耶樸教ヲ

コノミマス 故 一度ハ 和尚共ガ 言ケマス 耶樸宗モ 初
一人ヨリ 起テ 今 世界ニ 弘マリマシタ 日本モ 永リ
弘マラスナラバ 一度ハ 眞ノ 道ヲ 知マス ト云ハ
余 此 説諭ヲ キ、 頗ハ 寒 腸ノ 至ナリ

十月廿八日

伊澤道二

通

明治

有リキニテ方極素箱
中半セキ

明治

Handwritten cursive text in Japanese, likely a letter or document, written on a separate sheet of paper placed over the main page.

明治
四年
四月

小池

12

贈月

小池

光ニ付テ社ヲ結
ハ只開化ノ御
信向イタシ中
感心イタシニ
ハナリニテ
月ヲ期ニテ別

未任ス
京ニ入込度
此ノ方概
命ヲ抛テ尽



福

明

大正十一年四月

小池

一 一月七日影山耕三曰ク近頃学校ヲ組立ルニ付テ社ヲ結
 三ツク凡十人キ出来シタコト人々初ハ只開化ノ御
 手傳トノ心得ニシテガ近日ハ各バインブル信向イタシ中
 私ナドノ皮コトテハナヒ教法ノ徳化実ニ感心イタシス
 一 曰ク学校生徒六十人ニ及ヒ今ノ家テハ狭ナリニシテ
 新ニ一家ヲ借請ルヲモリテアル又才五月ヲ期シテ別
 ニバインブル塾ヲ開ノ目的ナリ
 一 グリシ事不遠ニテ神戸川越ノ積ナリ
 一 獨忠藏十月廿日大坂ギョリキ宅ニ来任ス
 一 同人曰ク私開化ノ御為ト存シ教師ヲ西京ニ入込度
 周旋セシ処不斗モ函因セラレシタリ然シ大槪
 官ノ海所置振ハ知ニシタユ此六ハ身命ヲ抛テ尽

カスル心得ナリ 朋友共神戸ニ来イト勸ニスレ托大
坂ハカ一官負ニ知己多ク殊ニ藤村ト別懇ニ入
竊ニ示誥ヲ遂十分快浪ノ策ヲ運ヒ友且官負
ノ救助アルハ自然ノ災モアリニセ又願ハクハ足下ト同
心賜力大坂ヲヒテ横濱同邦ニ俟友モノテアル
今般米利堅ヨリ教師 醫師 女教師 都テ七人
渡來 ウリヤムスト同居ナリ 近日別定イタスベシ
一キヨリキ コフテン学校ニ來ル生徒凡五十員
尙氏ノ見込ハ一月中旬百員ハ必誘フノ積也
右申上候也

癸酉末一月十日

伊澤道一

此は三事
中一
百九

年並

大正十一年
大隈侯爵印



ウリヤムス曰今茲ハ耶模約束ノ年デアルガ果シテ制
札ガトレシタ。日本已ニ黙許定約ニナリシニテハ本國
ヨリ申來ニシタ。然ニ人ガヨク知ユヘニ取除ト云ハ黙許
ノ約ヲ覆ノ策ニシテ人ヲ欺不用ノ言デアリス。
私ツ子ニ申セス大陽ノ朝ニ出テタニ没スルト聖教
ノ日本ニ弘ムルコトハ不可疑ニトナリ。日本帝王^{ミカド}數千
歳頑固ノ習情初テトケ今日俟宗ノ約ニ相成



コト誠ニ難有コト也。此上ハ速ニ帝王ニ聖水ヲ領セ
シメ下萬民ニテ聖教ニ入ナラバ各國ノ親アツク
國カモ大ニ強ナリセフ。私一度支那ニユキ用度
ヲ仕回シ永ク日本ニ住スルヲモリテアリマス。此上ハ
アンタ方モ安心シテ信シナサレト云し。

弗教師クウサン曰。日本民律モ未立シテ三教トモニ
取除ハ一ケスレシミシテ。復國ノ習凡可笑也ト云し
モリス曰。此頃默許ノ約ニナリシレ。突ハ明ニ用

宗シタキ^{ミカド}帝王ノ心ナレト。ゴニテ嚴禁ノ教ヲ一時ニ
許シテハ。下々ガ乱ヲナスエ。ゴサト默許イタレマス。
アンタ方トフゾ人々ニコノトヲ知セテ下サント云し。

諸教師近縣近邑ニ教ヲ布ント欲スレト。地理人情
ヲ不知。其策未伸。西京博覽ヲ機會トシ。モリス
等近日入京ノツモリナリ。弗教師ハ已ニ入京セリ。
一往京地ノ景況ヲ見追テ施行ノ意ナリ。

或西洋人曰。斬髮ハ諸人ノ思付ナリヤ。政府ノ沙

汰ナリヤ。答政府ノ諭ニヨリ人口斬髮イタスナリ。
曰三六馬鹿ノコト也。人民ノ自由ニ任スル也。三年ノ内ニ
自身ニ斬テシマフナリ。三頃教部省アリテ。諸人
ニサトス由。コレモ不用ノコトナリ。五年ノ内ニ。教法モ
必一變スベシ。日本ニテ耶襖ヲ制禁スルコト。変ヒテ
カナハヌコトテアルト云シ。

創忠三キヨリキニ隨逐。中村喜一ウリヤムスニ隨ヒ。
筆稿ヲナス。二人坂地ノ巨魁ナリ。

和州壹麻寺和尚某グーザンニ入門。其由ナリ。未何ノ
為ナルヲ知ス。可怪コト也。

曾テ諸藩ニ御預ノ邪徒。追々脱轉ノ由也。

ウリ。学校生徒世負ナリ。狭ナルニ。其余ノ入門
ヲ辞ス。追テ市中ニ杜大ナル学舎ヲ設ルノ心ナリ。
ウリ同塾ノ初。余曰。春來入門ノ徒數十負ナレト。
或ハ一日或ハ五日ニナ。永續セズ。日本人ノ性質アリ
心易ケレハアナルモノナリ。依テ已來ハ初ニ國処

姓名委リ聞糾シ。束脩一四ヲトリ。月謝ヲトリ。且
聖書ハ安價ニ賣渡ヘシ。束脩ホ、師ノ礼ニシテ
更ニ貧ニアラス。礼ヲ不正ハ。弟子ホ師ヲ重セス。其
金ヲ積。後ニ学校ノ資費ニ充ベシ。ナホ生徒多
ケレバ規則立カケシ。畢竟名聞ノ徒ヲ多ク集ルヨリ。
真ノ篤志ヲ育ムガ教師ノ為ナルベシ。ウリ犬ニ
此言ヲ信用セリ。入町生束脩ニ恐テ去者多ク可
笑トモ也。夫、ウリヤムスハ和漢ノ語ニ通シ。其智カ。

根柢カ。拔群ノ教師也。且温潤大度。生徒ヲ撫養
スル懇切シ。帝ニ母ノ子ニ托ゴトキノミナラス。然ニ生
徒ノ永久セザル。朝來リ夕去。十々歳來受洗篤
信ノ者アルヲ不聞。横濱東京ノ教師ニ比スレハ。實ニ
寒々タリ。謂ハ人知ナキモノ歟。將時未到歟。可怪
トモ也。童生徒ノミナラス。奴僕亦三月ヲ全スルモノナシ。
近隣ノ市人曰。彼家曾縊死ノ者アリ。故不吉多シ。
カリ近隣ノ評ヲ招ニ至ルニト。赤坂地ノ鴻福ナリ。

キヨリキ 学生七十員ニ充テ。岡志三信後ヲ誘
ヘ兵未歸向ノ徒ナシ。坂地ハヨホト開ルノ大ソキ地
ナリト。時ニ慨詆セリ。

神戸 学生而負余ナリ。吉田。倉谷。ハモノ執事
タリ。公會徒中余人。岡母貞三。及同父兄影山
耕三。執事ナリ。前田泰一丹波生歿。其母歸ヲ開。
異書ヲアキナフ也。近日米國女教師二員
來ル由也。

右之通 諸座居セ

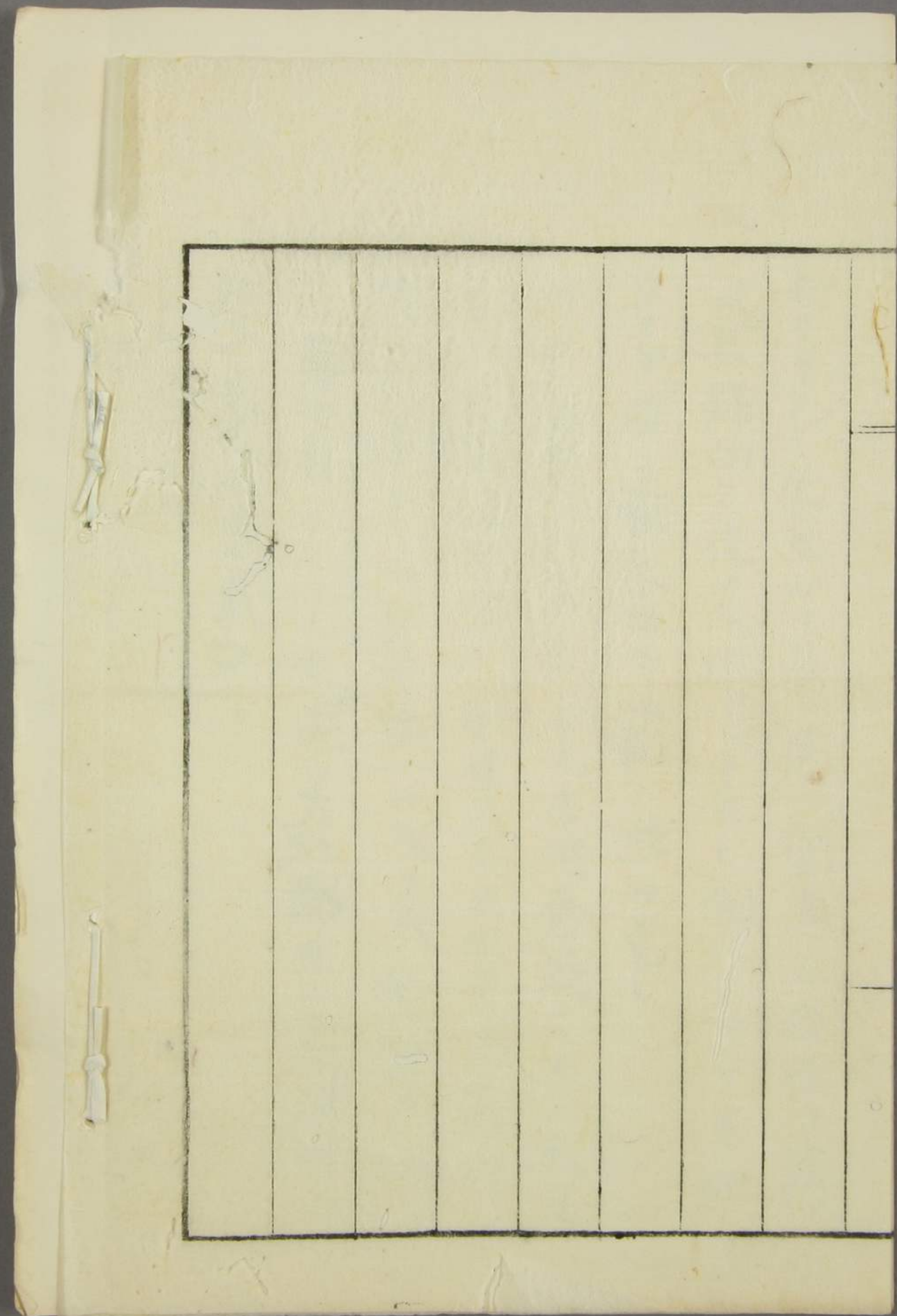
西四月

大坂喋者 某教向

(伊次 1/10)

追啓

ワリヤムス 三月廿四日上海ニ赴ル



四月十一日

口上

四月十一日耶模釘死ノ日ナリ。教師路加福音傳世三章ヲ講シ。悽然哽塞ス。聽者ヲシテ感慟セシム。

十三日模生之日也。滿堂百花ヲ嚴飾ス。此ハ耶模再生ノ標示ニシテ。人々想像ノ念ヲ生セシムルノ事ト云。

教師ナラシ。同妻。及女教師某。十八日十五日入京ノ覚悟也。中村規一隨伴。去歲キヨリキ之策ヲ追。

西京在任ノ志願ナリ。速ニ中村ヲ禁固シ玉ハスニハ

伊丹
大正十一年四月



○ 遂ニ後害ヲ醸スヘシ。中村ハ越後糸井川也ノ出
生ニシテ。浄土宗ノ僧也。少ク佛理ヲ知。佞媚狡猾。
キヨリキ ウリヤムス 西窟ノ際ニ周旋シ。生徒ヲ誘ヒ。
教師ヲ扶ケ。邪徒ノ先導守タリ。

○ キヨリキ 和語稍々進。此頃日曜日ニ説教ヲ始
ム。語学生皆會ス。其式簡易。横濱バラ之公會ノ
コトシ。中村規一其訳録ヲ抄シ附与セリ。

○ 頃日尙忠三放逐セラレ。神忠三西京ノ婦ヲ娶ル。共與ニ

教師キヨリキニ給仕ス。此頃故ナリシテ妻ヲ出シ。更ニ
新婦ヲ娶ントス。キヨリキ弁解懇重。忠三遂ニ肯セ
ス。キヨリキ大ニ憤怒シ。犯律ノ旨ヲ責。遂ニ拒絶
スト云シ。

○ 尙氏教師ニ付属シ。勤テ異教ヲ主張スルモ。畢竟心
腹ノ為ニシテ。真心信スルニヤラス。佞媚狡猾可憎ナレト。
渠等即邪徒ノ根礎ナレハ。今瓢流ノ時ニ當テ。渠之
活路ヲ立遣シ。至誠ニ弁解セバ必挽回スヘシ。然則中

明治三十二年十月廿八日
中野天守

伊豆

大正十二年四月
大隈侯爵邸書齋

日記

米教師ナラ一夫妻及女教師負与力所：備它ス石
鐵縣今井正篤中寫某隨逐ス

関忠三ギヨリキ：放逐セラレ西京ヨリ本縣越后：
赴シ由也

日曜日：鐵道寮之官負某モリス之説教ヲ聞曰
ハ船來シテ教ヲ布故難有コトアルカト思シ：教ノ淺近
ナル年ノ拙キ一モ聞ヘキモノナシヨテ日本人ヲ入シ

ト思ハ浅間布トセト云シ 今井曰教師斯追学シテ
弘教スルニ篤信ノ人鮮シ如是ナラハ切支丹ノ日本ニ弘
テラニコト難カルヘシモリス曰耶糴ノ人ヲ教ル初ハ一人
也今ハ世界ニ滿テリ日本モ初ハ一人ノ信スル者ナシ今ハ
横濱神戸ヨホトアリス大阪モウリヤムス參リニシリ
時ハ一人モアリニセ又今ハパンリ方ガコノ會堂ニ集メス
十年百年ノ後ハヨホトアリニセフ私共ハ耶糴ノ道ヲ
人ニ教ハカ勤シハ一人テモ傳人カレハ説テカクセニスト
云シ

四月廿七日之會公ニ大阪西大但區長金沢之某某^中入行
セリ語学ヨリ誘レ無心ニシテ公會ニ列ルニカ^中愍然ノ
至也

神戸教師グリシンベレー四月廿日西京行生徒四名
隨行セリ

神戸宇治ノ学校ニ女教師一人來リ教授ヲ初ム
並田泰一書肆ヲ開ハイブルヲ賣出ス也学校ノ幹
夏ハ吉田 倉谷也小林駒吉小野節 北村時太神

市川清齋等上足之才子也

癸酉四月

喋者某敬白